

令和6年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「共同研究班」 研究報告書

令和7年4月30日現在

研究課題名	国家の生存戦略に関する共同研究		
担当者	氏名	所属機関・職	
	宇山 智彦	スラブ・ユーラシア研究センター・教授	
班員 1	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	吉村 貴之	早稲田大学ロシア東欧 研究所・招聘研究員	アルメニア近現代史
	研究テーマ		
	アルメニアの政権交代についての比較		
班員 2	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	小森 宏美	早稲田大学教育・総 合科学学術院・教授	エストニア近現代史
	研究テーマ		
	ペレストロイカ期のエストニア・ソ連関係		

研究成果の概要

ロシアによるウクライナ侵略の継続に加え、アメリカでの第2次トランプ政権の発足により、世界各国は混沌の中で生存戦略の構築を余儀なくされているが、本班では、より長期的な現代史の視野や地域的な文脈から現状を理解することを目ざした。

小森は、エストニア独立の過程で重要な意味を持ちながら、今では忘却されているロシアとの二国間協定が1991年1月12日に調印されるに至る過程を、エストニア政府関係者回想録等の資料に基づいて詳細に再構成することを試みた。1990年3月、リトアニアが独立回復を宣言したのに続き、エストニア最高会議は独立回復への移行期に入ることを宣言し、ラトヴィアも5月に同じ道を選んだ。ソ連中央政府がこれらの宣言の撤回を求めて強硬策を取ったことに国外で非難の声が高まった一方、ドイツ統一問題でソ連との協力を必要としていた西側諸国はゴルバチョフの立場の弱体化を望まず、双方に交渉による解決を求めた。エストニアはソ連中央との交渉を探ると同時に、ロシアの指導者の地位を確保したエリツィンとも関係を結ぼうとし、連邦構成共和国間の水平的な関係構築に前向きなエリツィンはこれに応じた。この交渉の成果が1991年1月12日に調印された協定であり、エストニアに居住するロシア語系住民への国籍付与、両国の領土的一体性の保障、ヨーロッパ的価値観を基礎とした人権・主権などが盛り込まれていた。これらは結局、その後も解決し難い問題として残ったが、当時、ゴルバチョフとエリツィンの権力闘争

研究成果の概要（続き）

を背景にしていたとはいえ、エストニアとロシアの間で妥協点が見出されたことは、協調的な生存戦略のあり方として注目に値する。

吉村は、旧ソ連の多くの国で、政権の生存戦略として権威主義的な手法が採られることが増えている中で、アルメニアのパシニアン政権がどのような生存戦略を採り、それが小国アルメニアの生存戦略とどう関係しているかを、現地調査と選挙結果分析をもとに研究した。ナゴルノ・カラバフ問題で不手際が続いた同政権は支持率が低迷しているが、より強権的だった元大統領らを担ぐ野党への支持も広がっていない。政権は、選挙での低投票率や、野党の乱立による批判票の分散に助けられ、選挙介入などの権威主義的な手法を大規模に使わずに辛うじて権力を維持している。ただし、パシニアン首相が2025年2月19日にテレビ演説で表明した『真なるアルメニア思想』では、抽象的な表現で個人主義と同時に国家主義的な目標が掲げられ、権威主義的な芽もある。対外関係では、安全保障面で欧米やインドとの協力を進め、EU加盟も目指しているが、経済面でのロシア依存は変化していない。内政面でも外交面でも、変化を掲げつつ曖昧さを残す生存戦略となっている。

宇山は、脱植民地化が常に困難と両義性を抱えていること、中央アジア諸国が諸大国、特に中国やロシアとの関係を維持しながら自立性を保つための戦略を立てていることについて研究した。また、カザフスタンが最近強調するミドルパワー概念が、日本の対中小国外交においても意義であることについて論説を書いた。

2025年2月27日に開いた本班の報告会では、小森が「1990年代前半のエストニア・ロシア関係」、吉村が「アルメニアと権威主義化」と題する報告を行い、上記の諸論点を踏まえながら、現実に対応しつつ独自性を追求する中小国の生存戦略を多面的に論じた。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

<雑誌論文>（いずれも謝辞無し）

小森宏美「ペレストロイカ期エストニアにおける民族／国家象徴をめぐる議論」『早稲田大学教育学研究科紀要』第35号、2025年3月、17-27頁。

宇山智彦「日本の中央アジア外交戦略はどうあるべきか：創造的なミドルパワー外交の構築へ」『外交』Vol. 88、2024年12月、122-127頁。

<学会発表>（いずれも謝辞無し）

KOMORI Hiromi, "Revisiting the 1991 agreement between Russia and Estonia: A false ally?" European Social Science History Conference, Leiden University, 26-29 March 2025.

YOSHIMURA Takayuki, "A Historical Origin of the Nagorno-Karabagh Conflict," The 12th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, Seoul, 29 June 2024.

宇山智彦「中央ユーラシアの「脱植民地化」：ロシア革命期からウクライナ戦争期まで」スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会、2024年12月13日。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

なし

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。